

Newsletter of the Kansai Chapter No. 24, The Society for Research in Asiatic Music

(社) 東洋音楽学会関西支部

## 支部だより

第 24 号(1995-11-15)

新: (社) 東洋音楽学会関西支部 〒560 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部山口研究室 気付 FAX 06-850-5121

### —— 第176回関西支部定例研究会のご案内 ——

とき 1995年12月2日(土) 14:00 ~ 16:15

ところ 大阪大学文法経講義棟13教室

〒560 豊中市待兼山町1-5

会場へのアクセス: ①阪急宝塚線「石橋」駅下車徒歩15分 / ②「螢池」駅下車  
タクシー5分 / ③モノレール「柴原」駅下車徒歩10分

14:00-15:00 「研究発表」

「語り物音楽としての義太夫節の音楽分析 —吟誦・朗誦・詠唱について」

山田智恵子

15:15-16:15 [連続講座] <音の今昔>

「尺八古典本曲にみる旋律構造の改編」

月溪恒子

司会 金 英峰

終了後、忘年会を石橋駅か千里中央駅の近辺で開く予定です。当日詳細をお知らせしますので、ふるってご参加ください。

### —— 第177回関西支部定例研究会のご案内 ——

とき 1996年2月17日(土) 14:00 ~ 16:30

ところ 大阪音楽大学K号館(水川記念館)

〒561 豊中市名神口1-4-1 TEL 06-865-0545 (K号館事務室)

会場へのアクセスについては、4頁の地図をご覧ください。

14:00-15:00 [連続講座] <音の今昔>

「ガムラン・ドゥグンいまむかし」

福岡正太

15:15-16:30 [ゲスト講演・演奏]

「現代に生きる伝統」

田嶋直士(尺八演奏家)

司会 小西潤子

## 第175回定例研究会発表要旨(記録)

研究発表「平安期における時間意識の構造 — 平安びとの音楽受容の側面から」 岩堀智美

神代を歌う記紀が生成された時代は、実際には神代の崩壊の時代であった。壬申の乱(672)により、神武天皇の御世以来連綿と続いてきたと神話が語る栄光とは対照的に、当時の都は荒廃し、人々は再び返ることのない時間を意識するようになる。時間が時間として意識されるためには循環することのない何物かが意識されなくてはならない故に、ここで初めて時間が認識されたといえる。万葉の時代は、激しい政治的動乱の時代でもあり、そこでは神話的時間意識と歴史的不可逆的時間意識が交錯している。『万葉集』の最期を飾る大伴家持の歌にはいまだ神話的循環的な時間意識があると言われるが、このような過渡的な交錯した時間意識を経過した後に現われる『古今集』(905)では、既に神話的時間は窺われず、すべてが時の推移のうちに眺められるようになる。

平安期になって、過ぎ去りゆく時間だけが明確に意識されるようになる背景には、平安京という極めて人工的な場所での生活が挙げられる。平安遷都は、神が天降りしたという地からの分離であり、人々からの分離でもあった。神話的な時間意識からも離れ、貴族社会である故に農耕から感受された循環的時間からも離れた平安京での生活は、人々に万物流転の仏教思想と相まって、不可逆的時間意識のみを感受させることになったのである。

平安期の時間意識の構造の特徴は、不可逆的時間意識を抱きながら、それ故に神話的時間意識に支えられていた時代を切望し、それを再現しようとしていたところにある。平安びとが事更に年中行事を繰り返していたのも、まさに儀礼で画されていた循環的時間の再現であるといえる。このような二重構造を持つ時間意識の中で、時間の顯在的体験としての音楽はそのどちらの意味においても用いられる存在であった。年中行事の中では、循環的時間意識の再現として、そして仏教行事においては現世を超えた極楽世界への担い手として、それぞれ重要な役割を果たしていくこととなるのである。

研究発表「口頭伝承による石見神楽の音楽 — 『真がた』の場合」 テレンス・A・ランカシャ

島根県の西部にある石見神楽で演奏される音楽は、口頭的に伝承されるものである。特に、歴史的に見ると浜田市の西部から益田市にかけて存在する神楽社中のあいだに伝承経路が知られており、三隅町の宇治社中で活躍した佐々木栄左衛門という上演者は1900年ごろから30年間多くの神楽社中に19世紀の終わりにできた新しい「八調子」とよばれる音楽や舞踊のスタイルを教えた。このため多くの社中は同じように演奏しているのだと、すくなくとも同じ地域の上演者がいう。だが、様々な社中による「真がた」という神の出現を伴奏する曲を分析すると伝承のプロセスから社中間にいろいろの違いが現わってきた。それぞれの特徴を持つ太鼓、笛、声を個別に検討するとこれは明らかになる（声が社中間比較的に安定なので、今回は声の分析を省いた）。

太鼓の場合には8拍から成る決まったパターンがそれぞれの社中にあり、パターンそのものはほぼ同じように表現されているにもかかわらずパターンの配列は様々である。ある社中の演奏では一定の配列がみられるのに対して、他の社中の場合、社内奏者によって異なる配列で表現されている。しかし、奏者は社中間の違いをあまり意識せず、一つの社中のメンバーが他の社中と共演する場合、演奏は困難となる。また社中内で新しい師匠から伝承を受け継ぐ場合、世代による演奏の違いも明らかに見られる。

それに対して笛は、社中間だけではなく一つの社中のそれぞれの奏者によって個性的に表現されている。笛の旋律はそれぞれのフレーズで構成され、これらのフレーズは素材となり、奏者によって様々に配列される。旋律的なサイクルを始めるフレーズとサイクルを終わらせるフレーズは同じで、石見神楽の笛の伝統をある程度明示している。それぞれのフレーズは共通であるが、奏者によってまったく同じように表現されているのではない。とはいって、それぞれの違いは伝承のプロセスから生じたものであると考えられる。

## 第 176 回定例研究会連続講座&lt;音の今昔&gt;要旨(予告)

連続講座「尺八古典本曲にみる旋律構造の改編」

月溪恒子

「音の今昔」と題する連続講座も回を重ねて12回目となった。その間、さまざまな音文化を対象に多角的な切り口による興味深い発表がなされてきた。それらに共通するキーワードをひとつあげるならば、それは時間軸上におこる「変化」である。尺八古典本曲を対象に「音の今昔」を語る場合にも、変化の軌跡を辿りうるいくつかの重要な視点が考えられる。例えば、普化宗の修行行為としての尺八吹奏(吹禪)から音楽の演奏行為へと脱却する過程で生じた担い手の「音」に対する意識変革と、それによってもたらされた演奏様式の変化(その顕著な例が琴古流本曲)。あるいは、個々の楽曲が持っていた固有の意味・目的や演奏の場・機会といった、宗教的コンテクストの変換に起因する楽曲および奏法の変化(その要因は、普化宗の儀式や托鉢などの修行形態の禁止にある)。さらに楽器という視点からは、尺八の法器(宗教の具)から楽器へのパラダイム転換や、楽器尺八自体の内部構造変化に伴う奏法変化の問題を指摘すべきであろう。

しかし、上記の諸視点はあくまで暗黙の前提であって、今回の発表は「今」と「昔」の音や楽譜や楽器を比較し、その変化の諸相を提示しようとするものではない。「今」に伝承される楽曲に即し、可能な限りその成立時点に遡って、既存の楽曲からどのような「旋律構造の改編」が行われた結果

「今の楽曲」となったかを探るのが目的である。古典本曲は絶え間なく変化してきたし、いまなお変容している。しかし、小さな旋律型の増減や、音律・リズム・テンポ・装飾法等の微妙な変化は、多かれ少なかれどのジャンルにも見られる現象であって、ことさら古典本曲の専売特許ではない。これらの変化の多くは可逆的であるが、「旋律構造の改編」は不可逆的変化のひとつである。この問題について、《虚空》《阿字観》《鶴の巣籠》などの具体例を用いて考察したい。なお、《阿字観》を除き、楽曲の曲名としての出現は古いが、今回遡るのはせいぜい20世紀初頭までである。

## 第 177 回定例研究会連続講座&lt;音の今昔&gt;要旨(予告)

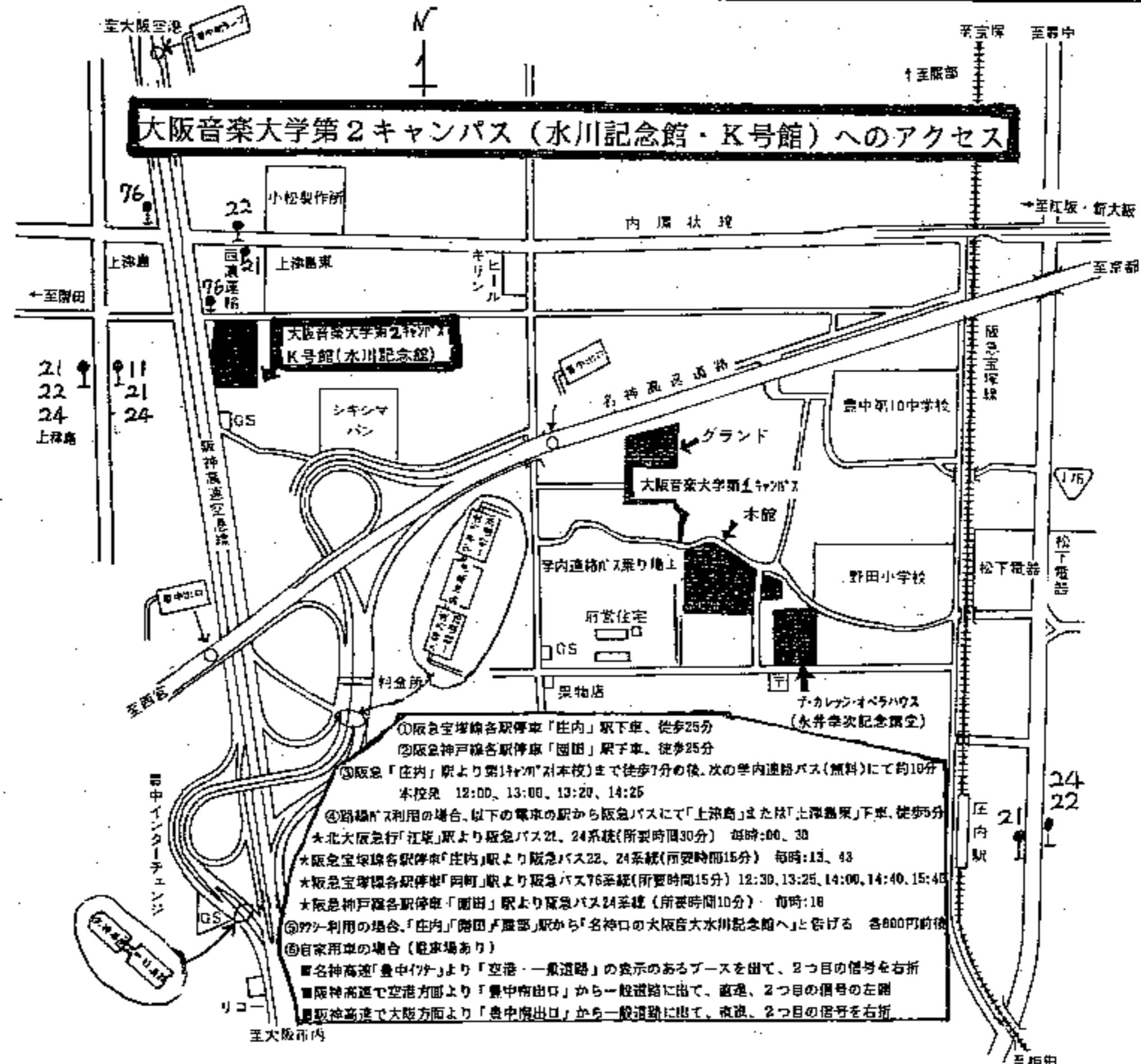
連続講座「ガムラン・ドゥグンいまむかし」

福岡正太

ガムラン・ドゥグンは西ジャワのスンダ人の小編成ガムランである。かつてはカブバテンと呼ばれた県庁・県知事公邸に備えられ、貴族たちの様々な儀式や饗客の歓迎などのために演奏された。しかし、インドネシア独立以後、ガムラン・ドゥグンを支えていた社会秩序は根底から覆され全く新しい時代を迎えた。ガムラン・ドゥグンとそれを支える音楽家たちはこの新しい時代にどのように対応し、ガムラン・ドゥグンを発展させてきたのだろうか。

戦後ガムラン・ドゥグンの新たな支えとなったのはマスメディアである。1950年代後半、国営ラジオバンドゥン支局専属の音楽家たちによるガムラン・ドゥグン演奏の放送が始まり、戦後のガムラン・ドゥグン再興の出発点となった。さらに1970年代に入るとカセットテープが急速に普及し、伝統音楽の録音も商業的に生産されるようになった。その中でガムラン・ドゥグンはドゥグン・カウィと呼ばれる新しいレパートリーを築いてきた。それは今日ドゥグン・クラシックと呼ばれている古典的レパートリーとは大きく異なる。もともとガムラン・ドゥグンは貴族の世界で育まれ、「洗練された」音楽として「粗野な」民衆の音楽とは区別されてきた。しかし新しいレパートリーは、「粗野な」ジャンルも含めた他の伝統音楽の諸ジャンルとの交流により生まれ発展してきた。又、戦後、結婚披露宴や割礼披露宴などの機会にもてなしの樂としてガムラン・ドゥグンがよく使われるようになった。こうした祝宴は華やかさ・きらびやかさを増してきており、ガムラン・ドゥグンも女性ばかりの演奏グループが生まれるなど、その影響を受けている。

このような変遷を踏まえ、ガムラン・ドゥグンの社会的位置づけがどのように変化し、その音楽がどのように変貌したのかを論じる。



#### 関西支部定例研究会について

開催および「支部だより」でのご案内予定（会場は未定です）

第178回 1996-4月または5月

「支部だより」第25号（3月下旬発行予定）

第179回 1996-6月または7月

同上

第180回 1996-9月または10月

「支部だより」第26号（8月下旬発行予定）

第181回 1996-11月または12月

同上

#### 発表申し込み方法

◆連続講座＜音の今昔＞は第177回定例研究会（1996年2月）をもって終了します。従って、フリーの研究発表などで進めます。お申し込みください。ただし、申し込み多数の場合など、ご希望に添えないこともあります。あらかじめご了承ください。発表の種別（研究発表、調査報告、資料紹介、研究演奏等）、題目、希望使用機器、氏名、連絡先を明記の上、はがきまたはファックスにて関西支部事務局（大阪大学文学部山口研究室気付）宛て送付ください。

◆第178-181回のうち1~2回を近畿地区以外で開催したいところです。地区委員および一般会員の方々からのアイディア・ご意見等を歓迎します。

◆住所等の変更は支部事務局ではなく、学会本部へお知らせください。

〒162 東京都新宿区市谷左内町3番地 正派邦楽会館内 (社) 東洋音楽学会

☎ 03-3268-1237 FAX 03-3268-1238 振替 東京 00160-6-55723

◆発行 (社) 東洋音楽学会関西支部

〒560 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部山口研究室気付

FAX 06-850-5121 (電話連絡を避けていただくため電話番号は記しません)